

月刊

# 地域保健

1  
2015

●特集

## 妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援 —日本版ネウボラを目指して

●フロントランナー

田川由美子さん 《山形市 市民生活部 健康課 保健指導総括主幹》

●ピープル

長 純一さん 《石巻市立病院開成仮診療所 所長》



## 6 特集

# 妊娠・出産・子育ての切れ目 ない支援 ~日本版ネウボラを目指して~

- 8 【概論】妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援について
- 14 【インタビュー】松崎秀樹浦安市長に聞く  
日本で最も若いまち「浦安市」が始めた浦安版ネウボラ
- 18 【事例】千葉県浦安市  
子育てケアプラン、産後ケアなどに部署を越えて取り組む
- 26 【事例】東京都世田谷区  
子ども・子育て支援を含めた地域包括ケアシステムを展開
- 36 【事例】山梨県北杜市  
市民とともに歩む、みのりある妊娠・出産・子育て支援
- 44 【事例】愛知県高浜市  
母子保健と子育て支援の機能を一元化、“こども版地域包括ケア”を目指す
- 53 【事例】三重県名張市  
人と人、人と地域、保健・医療・福祉をつなぐ
- 66 【解説】フィンランドのネウボラとは

1 フロントランナー ▶ 田川由美子さん (山形市 市民生活部 健康課 保健指導総括主幹)

72 REPORT ▶ 平成 26 年度保健師中央会議 《続報》

88 ニュース ▶

105 ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ!

麻生紗央里さん (大分県北部保健所 地域保健課 疾病対策班)

110 ピープル ▶ 長 純一さん (石巻市立病院開成仮診療所長、医師)

連載

- |    |                           |      |
|----|---------------------------|------|
| 74 | 保健師のための閑話ケア 《第 49 回》      | 藤本裕明 |
| 78 | 中臣さんの 環境衛生ウォッチング 《第 34 回》 | 中臣昌広 |
| 83 | いまだき子育てアドバイス 《第 208 回》    | 中川信子 |

情報BOX

89……訪問に役立つ“安心・安全”の豆知識、BOOK、月間レーダー、information、月間レーダー special edition!?

田川由美子さん

● 山形市 市民生活部 健康課 保健指導員 田川由美子

郷土愛が保健師活動の原動力

分散配置の中で後輩を育成できる仕組みをつくりたい

田川由美子さんは、生まれて以来、一度もほかの町で暮らしたことがないという生粋の山形市民だ。子どものころは、おとなしくて内弁慶。着せ替え人形で遊んだり、本を読んだりするのが好きだった。そんな田川さんが、保健師という仕事に活躍の場を見いだし、今では保健指導総括主幹として責任ある業務をこなすようになった今日までのストーリーを聞いてみた。

## 地域に密着した仕事

高校に進学する際に、「何か資格を持った方がいい」という両親の勧めで、普通科ではなく職業科を選択。山形県立山辺高校衛生看護科に入学した。3年間、看護師になるための教育を受けたが、どうしても病院で働く自分の姿がイメージできなかったという。

「もともとのおんびりしているタイプなので、臨床実習のときのせわしなさが

自分に合わないと感じましたし、夜勤をこなせる体力があるとも思えませんでした。そこで、さらに資格を取ろうと、保健師の勉強ができる学校に進むことにしたのです」

といっても、保健師になるという確固たる気持ちがあったわけではなく、まず進学してから考えようと思っていたそうだ。いよいよ就職という時期に、タイミングよく地元の山形市で保健師の募集があり、21歳のときにスナナリとその職に就いた。

最初は新人だったので、人口の少ない地区を担当させてもらい、家庭訪問が主な業務となった。そんな新人時代に、保健師としての意識が高まる出来事に出合った。

「脳血管疾患を患っていた方の家に訪問に行く時、その方が亡くなっている状態を見た。『保健師です』という時、『どうぞ上がってける』と家族の方にいざなわれ、お線香をあげさせてもらいまし



た。そのときに認識したのは、保健師は地域の人の生活や人生に密着した仕事をしているということです。私はそれまで、強い志を持つてはいませんでした。それが一つのきっかけとなって、保健師の仕事を意識するようになった気がします」

## 1歳6カ月健診に 臨床心理士を

次第に、保健師の仕事を自在にこなせるようになっていった田川さん。中堅期は、「生意気で怖いもの知らず」だったという。さまざまな事業を提案し自由にやらせてもらい、上司に対し



# 妊娠・出産・子育ての

## 切れ目ない支援

日本版ネウボラを目指して

母子保健、子ども・子育て部門において、「ネウボラ」という言葉が注目を集めている。ネウボラとはフィンランドの妊娠・出産・子育てをワンストップで支援する仕組みだが、わが国においても社会保障制度改革国民会議の報告書に「妊娠・出産・子育てへの連続的支援」の重要性が盛り込まれ、健やか親子21（第2次）で「切れ目ない妊娠・乳幼児への保健対策」が基盤課題として位置付けられるなど、妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援を目指す機運が高まっている。今月号では、妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援を目指す意義について考察し、担当部門を越えて果敢にチャレンジする自治体の好事例を紹介する。また、フィンランドのネウボラについて専門家の解説を掲載する。

- P8 **【概論】 妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援について**  
◎福島富士子（東邦大学看護学部）
- P14 **【インタビュー】 松崎秀樹浦安市長に聞く  
日本で最も若いまち「浦安市」が始めた浦安版ネウボラ**  
◎取材 余田雅美（ライター）
- P18 **【事例】 千葉県浦安市  
子育てケアプラン、産後ケアなどに部署を越えて取り組む**  
◎取材協力 本田恭代さん（浦安市こども部）、並木美砂子さん（浦安市健康福祉部）  
◎取材 余田雅美（ライター）
- P26 **【事例】 東京都世田谷区  
子ども・子育て支援を含めた地域包括ケアシステムを展開**  
◎世田谷区子ども・若者部 子ども家庭課
- P36 **【事例】 山梨県北杜市  
市民とともに歩む、みのりある妊娠・出産・子育て支援**  
◎三井ひろみ（北杜市市民部）
- P44 **【事例】 愛知県高浜市  
母子保健と子育て支援の機能を一元化、“こども版地域包括ケア”を目指す**  
◎鈴木美奈子（高浜市福祉部）
- P53 **【事例】 三重県名張市  
人と人、人と地域、保健・医療・福祉をつなぐ**  
◎上田紀子（名張市健康福祉部）
- P66 **【解説】 フィンランドのネウボラとは**  
◎高橋睦子（吉備国際大学大学院）



# 妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援について

今なぜ「妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援」が求められるのか。東邦大学看護学部の福島富士子教授に「日本版ネウボラ構想」を基に解説していただいた。



東邦大学看護学部  
福島富士子

(ふくしま・ふじこ 看護学科  
家族・生殖看護学研究室教授)

## はつめい

筆者は次世代の再生産である出産時に、母親も自らのリスタートを迎えると考えています。出産には安全かつ安心できる環境が求められ、出産を終えて退院する母親も含め、不安を感じてしまう現状は変える必要があります。また産後は「初めて地域とつながるとき」でもあります。生活や生き方を建て直し、シチズンシップを育てる機会にもなります。「妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援」は、個々の母親を医療モデルで支援する狭義のケアではなく、地域との関係性を再構築し、ソーシャルキャピタルを醸成する生活モデルとしての新たな概念といえます。

母親は出産後、慣れない育児に戸惑い、拘束される日々を送っています。核家族の増加に伴い頼れるはずの親を頼れず、地域との関係も薄れ、周囲か

らの子育て支援を期待できなくなっている現状があります。これらのことが産後うつや児童虐待、育児放棄の要因となっています。

産後の状態を良好に保つには産前の過ごし方が重要で、独りでつらい思いをしている母親をサポートする場所が必要で、たとえ地域に出産可能な病院がなくても、妊娠・産後をケアする場所があれば出産前後をある程度はカバーできます。安心して子育てのできるケアシステムの構築こそが急務であり、保健師・助産師・看護師などの専門職だけでなく、地域の子育て経験者や子育てに感心がある人たちが協働してシステムをつくり上げていくことが大切です。

わが国における第一子出産時の母親の平均年齢は1957（昭和32）年の25・7歳から90（平成2）年には27歳となり、2000（平成12）年には28歳、11（平成23）年には30代に突入し

ました。個人差もありますが、高齢出産では20代女性と比べて体力の低下は無視できません。また、支援者となり得る両親も当然ながら高齢化し、思うように援助を受けられない現状があります。さらにパートナーである夫も年齢的に重要な仕事を抱える立場になっていることが多く、サポートを得にくい状況が考えられます。

今、インターネット上では「産後サポート」という言葉で検索をかける母親たちが増えています。また、「産褥シッター」「家事支援」で検索をするなど、かなりの数が挙がってきます。出産で消耗し疲れ切っている心身を回復させ、新しい家族との生活を始めるために、家事や育児のサポートをするサービスに関心が高まっている現状を物語っているとします。

子育て中の親を支援する意義は、産後うつや虐待防止だけにはとどまりません。母親や父親は近い将来、高齢者

を支える立場となります。地域における「妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援」の体験を通じて、人に対する思いやりや支え合いの心の重要性に目覚め、信頼や互酬性の規範を確認し、強化することが期待されるのです。

## 日本版ネウボラ構想

それでは「妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援」とは、具体的にどのようなものなのでしょうか。

最近、「ネウボラ」という言葉を耳にする機会が増えました。これはフィンランドの妊娠・出産・子育てをワンストップで支援する制度のことですが、わが国においても「日本版ネウボラ」を目指そうとする動きがあります。ここでは「日本版ネウボラ」の基本的構想と主な論点を紹介しつつ「妊娠・出産・子育ての切れ目ない支援」について説明したいと思います。



# 1つの問題を 多方面から見る目を持ちたい

相談者の心に入り込める保健師を目指して

あそう さおり  
麻生紗央里さん

●大分県北部保健所  
地域保健課 疾病対策班





クールな顔立ちと低い声、落ち着いた物腰。これが麻生紗央里さんの第一印象だったが、大きな声で笑いながらジェスチャーを交えて語る様子に、初々しさと感情表現の豊かさがうかがえた。

麻生さんは大分県中津市にある大分県北部保健所に勤務し、今年で3年目になる。中津市は福澤諭吉の生まれ故郷や、NHK大河ドラマの主人公、黒田官兵衛ゆかりの地として知られ、多くの観光客が訪れている。

### 幅広い世代の人に 自分から関わりたい

中津市に隣接する宇佐市で生まれ育った麻生さんは、子どものころからマイペースだったという。中学、高校時代はクラブ活動に参加せず、放課後は自由気ままに過ごしていた。特に情熱を傾けていたのは4歳から習っていたピアノで、音楽の道に進もうと思っ

ていた時期もあった。

将来についていろいろと考えた末、経済的な安定が望める職業に就こうと決めた。資格を幾つか持っている方が選択肢が増えるからと、熊本大学医学部保健学科と同大学養護教諭特別科で学び、養護教諭と看護・保

健師の免許を取得する。子どもと触れ合うのが好きな麻生さんは、当初は養護教諭に憧れていたが、実習を受けて考えが大きく変わった。

「保健室で子どもたちのけがの手当てをしたり相談にのったりして感じたのは、もっと幅広い世代の人に自発的に関われる仕事があったらいいです。そんなとき、保健学科時代に受けた保健師の実習を思い出し、そちらの方が自分に向いていることに気付きました」



地元で働くことに決め、市町村よりも県の保健師の方が、異動もあり職場環境を変えながら経験を積めると考え、県の保健師を希望。「方向音痴」を自認している麻生さんは、土地勘のある中津市に勤務することが決まったときには安心したようだ。

### 「この対応でよかった？」 という疑問がいつもある

「初めてケース会議に出席したときには感動しました。教科書に載っている





プライマリ・ヘルス・ケアを実践し  
患者中心の医療を行う人材を育てたい  
健康問題を解決する力ギは保健と福祉にある



石巻市立病院開成仮診療所長 医師  
**長純一さん**

聞き手 編集部

東日本大震災の被災地の中でも最大規模の、宮城県石巻市にある開成仮設住宅。長純一さんは、2012（平成24）年5月にこの仮設住宅内にある石巻市立病院開成仮診療所の所長となり、プライマリ・ヘルス・ケアを実践しながら被災者の健康を支えている。その先には、医療だけではなく保健、福祉も含めて健康問題を捉える医師を育成し、地域のニーズに合った医療が全国各地で展開されることを見据えている。開成仮診療所を訪れ、長さんが被災地の問題をどう捉え、どう改善していきたいと考えているのか伺った。

**農業はソーシャル  
キャピタルを生み出す**

—長先生が地域医療に携わるようになった、きっかけについて教えてください。

**長** 「地域医療」をどう定義づけるかというのは難しいところですが、私は「農村医療」という言い方をしています。地域医療という言葉は、長野県の佐久総合病院（以下、佐久病院）

の\*1故・若月俊一先生が、貧しい農村、農民の健康を改善するために行っていた農村医療をライバル視して、長野県国保系医療機関の人たちが積極的に用いたことよって、全国的に広まったという歴史があります。

東京で生まれて関西で育ちましたが、もともと農村部やへき地、発展途上国で、医療を必要としている人たちのために働きたいと思っていました。また、あまりに生物学的な医学中心の医療に対し、患者中心の医療を実践し

**PROFILE** ● ちょう・じゅんいち ●

1966年東京都生まれ。信州大学医学部卒業。1993年長野県佐久総合病院に勤務し、農村医療の先駆者、故・若月俊一同病院院長よりその思想と実践を学ぶ。南佐久農村部の診療所で、訪問診療も行う24時間365日体制の地域医療を構築。2011年5月長野県の医療団長として石巻市で支援活動を展開。その後、佐久総合病院を退職し、2012年5月石巻市立病院開成仮診療所の所長に。翌年7月から石巻市包括ケアセンター所長を兼務。

\*1 医療は国民のものであり、住民が主体となるという考えの下、健康には生物学的な要因だけでなく社会的要因が大きく関わると捉え、臨床医学と社会学を合わせ持つ「農村医学」を確立した。「農民とともに」をスローガンに、地域住民の中に入り、住民の生活とその背景の地域社会の在り方、当時の農民の健康問題への意識の向上、貧困などの改善に取り組んだ。